

# Innovation for Cool Earth Forum

## ICEF2023 結果概要

# 目次

ICEFとは	2
第10回年次総会 (ICEF2023)	3
プログラム	4
開会挨拶	5
キーノートセッション	6
プレナリーセッション	7
サマライジングプレナリーセッション	9
コンカレントセッション	10
その他イベント	15
閉会式	18
ステートメント	19
ロードマッププロジェクト	22
運営委員	23
共催挨拶	24
ICEF2023 フォトギャラリー	25



## Innovation for Cool Earth Forum

ICEF2023 Report

(※パンフレット中に記載の役職名はICEF2023開催当時のものです)



## ICEFとは

Innovation for Cool Earth Forum (ICEF) は、地球温暖化対策の鍵となる「イノベーション」を推進するため、世界中の産学官のリーダーが議論する知のプラットフォームです。

2014年以降、経済産業省及び NEDO は、ICEF を毎年開催してきました。

21世紀の喫緊課題である気候変動に対処するため、産業界、学界、政府機関から著名な専門家が一堂に会して活発な議論を行い、イノベーションに基づく解決策を探求しています。

ICEF は最先端の知見を世界に発信し、気候変動の脅威に対する人々の意識を高め、行動変容の促進を目指します。また、多様化がイノベーションの源泉であるという認識の下、ジェンダー平等と若手世代の参画を推進します。



# 第10回年次総会 (ICEF2023)

## メインテーマ

Innovation for Just, Secure and Sustainable Global Green Transformation (GX)

## 開催形式

ハイブリッド会議 (於ホテルニューオータニ東京 / オンライン)

2023年10月4日(水)・5日(木)

## 主催



## 共催



## 後援機関



## 参加者

各国政府、国際機関、企業、学界等、79カ国・地域から約1,700名

## ICEF2023の成果

- ・「人工知能 (AI) と気候変動緩和」に関するロードマップ
- ・運営委員会ステートメント

# プログラム

## 1日目 10月4日(水)

- 9:30-9:45** 開会式  
西村康稔 経済産業大臣による開会挨拶  
田中伸男 ICEF 運営委員長による開会挨拶
- 9:45-10:00** キーノート 1  
宇宙飛行士 野口聡一氏、  
スタンフォード大学 スティーブン・チュー教授の講演
- 10:00-11:40** プレナリーセッション 1  
革新的な政策立案  
ジャン＝エリック・バケ 駐日欧州連合 (EU) 代表部大使の講演
- 13:00-14:45** その他イベント  
NEDO グリーンイノベーション基金事業シンポジウム  
「次世代型太陽電池で実現するグリーン都市」
- 13:05-13:10** キーノート 2  
ゲルト・ミュラー UNIDO 事務局長のビデオメッセージ
- 13:15-14:15** キーノート 3  
パネルディスカッション
- 14:30-16:00** プレナリーセッション 2  
公正な GX
- 15:00-16:00** その他イベント  
二酸化炭素除去技術 (CDR)  
「二酸化炭素除去 (CDR) の市場拡大に向けた初期需要の創出」
- 16:15-17:15** コンカレントセッション 1  
グローバルストックテイク
- 16:15-17:15** コンカレントセッション 2  
食料・水・気候変動

## 2日目 10月5日(木)

- 9:30 - 9:50** キーノート 4  
ファティ・ピロル IEA 事務局長と  
田中伸男 ICEF 運営委員長による対談
- 9:30 - 10:30** ICEF ロードマッププロジェクト  
「人工知能 (AI) と気候変動緩和」
- 10:00 - 11:00** コンカレントセッション 3  
革新的な再生可能エネルギーの利用
- 10:45 - 12:15** その他イベント  
BloombergNEF 共催イベント  
「グローバル・日本における最新の気候変更シナリオから分かる  
ビジネス機会・リスク」
- 11:15 - 12:15** スペシャルセッション  
エネルギートランジションに関する特別対談
- 13:15 - 14:15** コンカレントセッション 4  
持続可能な航空輸送
- 13:15 - 14:15** コンカレントセッション 5  
核融合テクノロジー
- 14:30 - 15:30** その他イベント  
若きイノベーターとの対話
- 14:30 - 16:00** その他イベント  
UNIDO 共催イベント  
「鉄鋼・セメント産業における脱炭素化への公正な移行に向けた変革一  
低・ゼロ炭素製品へ向けた需要と供給の拡大に向けた方策」
- 15:45 - 17:15** サマライジングプレナリーセッション  
ICEF2023 の総括
- 17:15 - 17:45** 閉会式  
デービッド・サンダロー ICEF 運営委員のロードマップ紹介  
山地憲治 ICEF 運営委員のステートメント発表  
田中伸男 ICEF 運営委員長の総括  
齋藤保 国立研究開発法人新エネルギー・産業技術総合開発機構  
(NEDO) 理事長による閉会挨拶

## 開会挨拶



経済産業大臣

**西村 康稔**

本日、東京GXウィークの一環として、第10回ICEFが開催されることを大変嬉しく思います。対面及びオンラインで参加いただいております皆様に歓迎の意を表するとともに、運営委員の皆様をはじめ関係者のご尽力に感謝いたします。

気候変動への対応は、全世界が共に取り組むべき喫緊の課題であり、できる限り早期に世界全体でカーボンニュートラルを実現することが重要です。他方、エネルギーを巡る各国の事情は千差万別です。今年日本で開催されたG7会合でも合意に至ったとおり、各国の事情に応じた多様な道筋の下で、ネットゼロという共通のゴールを目指すことが重要です。

ICEFは、今年、記念すべき第10回を迎えました。これまで、地球温暖化問題を解決する鍵である「イノベーション」の促進に向けて、最先端の知見や方策を世界に発信するとともに、気候変動に対する人々の意識を高め、行動変容の促進を目指してきました。気候変動、感染症の蔓延、国際紛争など、この10年で世界情勢は大きく様変わりしました。こうした様々な困難に直面している中で、イノベーションこそが課題解決の最も重要な鍵となります。

日本は、世界で初めて政府が発行するトランジションボンドであるGX経済移行債を活用した先行投資支援策などにより、GX実現の鍵となるイノベーションの創出に向けた150兆円(1兆ドル)超の官民投資を今後10年間で実現してまいります。引き続き日本の技術力という強みを活かして世界のカーボンニュートラルの実現をリードしてまいります。

本年のICEFでは、カーボンニュートラル実現に不可欠なクリーンエネルギーの安定したサプライチェーンの構築や、専門家による科学的見地から、COPでのグローバルストックテイクに関し、カーボンニュートラルに向けた取組を加速する上でのイノベーションの重要性を議論することとしています。また、気候変動に起因した干ばつや洪水による食料・水資源への影響など、多様なテーマについても議論します。さらに、昨今急速にその実現への期待が高まっている核融合技術が取り上げられます。

核融合分野では、いくつかの有望な技術が明らかになりつつあり、日本を含めた世界においてスタートアップの起業が相次いでいます。昨年12月、米国ローレンスリバモア研究所では核融合反応を起こすために投入した分を上回るエネルギーが発生したと発表されましたが、レーザー装置の制約等により一日一回しか反応を起こすことが出来ません。それに対して、浜松ホトニクスや大阪大学発ベンチャー「ex-fusion」は高出力レーザーの高速繰り返し照射技術を開発しています。核融合技術は、これが実現されれば、世界を一新する夢の技術であり、研究開発の現状や実用化に向けた課題などについて大いに議論していただきたいと考えます。

加えて、今回は、カーボンニュートラルを達成する2050年に、まさに社会の中核となる多くの若手世代（ヤング・イノベーター）の方々も登壇されます。将来の社会を担っていく立場から、全く新しい白地のキャンパスで、過去にとらわれない発想による積極的な議論を期待しています。

世界情勢の不確実性が高まり、様々な困難がある中で、ICEFにおいては、カーボンニュートラル達成に向けて力強く前進するための議論が行われ、自分達の発想や技術こそが解決できるとの心意気をもって、ここでの成果が広く世界に発信されることを期待しております。

# キーノートセッション

## キーノート1

スタンフォード大学教授（物理学・分子細胞生理学）、  
米国エネルギー省元長官 スティーブン・チュー氏の講演



宇宙飛行士、合同会社未来圏 CEO、東京大学特任教授、  
国際社会経済研究所理事 野口聡一氏の講演



## キーノート2

ゲルト・ミュラー UNIDO 事務局長のビデオメッセージ



## キーノート3

アンドリュー・Z・ファイアー氏、ポール・M・ナース氏、フィービー・クンドゥーリ氏、  
マルシア・マクナット氏によるパネルディスカッション



## キーノート4

ファティ・ピロル IEA 事務局長と田中伸男 ICEF 運営委員長による対談



# プレナリーセッション

## プレナリーセッション1 革新的な政策立案

本セッションでは、エネルギーと環境政策の様々な側面が議論された。例えば、欧州エネルギー政策の強みとして、排出制限、科学的根拠に基づいた政策形成、ステークホルダーとの協議が強調された。欧州は気候政策を成長戦略と位置づけ、イノベーションと競争力に貢献すると位置づけているが、将来の政策は加盟国の状況を考慮する必要があることも強調された。また、知識、政策、行動のギャップを埋める必要が指摘された。具体的には、脱炭素政策を法律に組み込み、プロジェクト実施を促進する政策を施行し、効果的なガバナンスを実現することが提案された。アメリカ政府が実施する高リスクで高性能な研究開発プロジェクト支援や、これらの技術を政策と法律に取り入れる取り組みも発表された。また、日本のコミュニティ連携を通じた廃棄物削減の取り組みが紹介され、イノベーション、若者の参加、国際協力の重要性が強調された。日本の風力と洋上風力のポテンシャルも強調され、脱炭素化のためにはインフラ開発と地域産業との合意形成の必要性も強調された。航空業界のための脱炭素政策の重要性も強調され、国際協力、エネルギーの多様化、再エネインフラのレジリエンスが言及された。

パネルディスカッションの中では、トップダウンとボトムアップの政策アプローチにはそれぞれ利点があると主張され、両方の視点が必要であり、脱炭素技術インフラの開発には必要なインフラを効果的に計画し実施するためにバックキャストアプローチが必要であると強調された。



**ウー・チャンホワ (モデレーター)**

ICEF 運営委員



**田中 伸男 (モデレーター)**

ICEF 運営委員長



**ジャン=エリック・パケ**

駐日欧州連合 (EU) 代表部大使



**坂野 晶**

一般社団法人 Green innovation 共同代表



**今井 雅則**

戸田建設株式会社 代表取締役会長



**マリア・フェルナンダ・エスピノサ・ガルセス**

元エクアドル外務大臣、元エクアドル国防大臣、第 73 代国連総会議長、GWL Voices for Change and Inclusion 持続可能な開発・ジェンダー平等・グローバルヘルス エグゼクティブディレクター



**エヴリン・ニンワイ・ワン**

米国エネルギー省エネルギー高等研究計画局 (ARPA-E) 長官



**ヘンリー・フーイ・ヒン・リー**

ボラーエアモビリティリミテッド 創設者





## プレナリーセッション2 公正なGX

本セッションでは、昨今の世界的な出来事に対するエネルギーへの認識の変化や、再エネ源の重要性の増加に伴うエネルギー安全保障の課題が強調された。公正な移行のための行動として、政府や関連機関と協力し炭素集約型産業の支援、雇用・教育・リスクリングへの投資、気候ファイナンスへの投資増加、人間中心とジェンダーセンシティブなモニタリングと報告プロセスの確立が提案された。経済成長に伴う発展途上国におけるカーボンフットプリントの急速な拡大や、経済成長を支援しながら移行コストを管理するためのカスタマイズされた対策の必要性が取り上げられ、既存の解決策に加えて新しい技術への投資の重要性も強調された。公正な移行のために石炭火力発電の段階的廃止が必要であり、温度上昇を1.5°Cに制限可能な技術が議論され、座礁資産を防ぐことの重要性が強調された。

加えて、若いリーダーのエンパワメントのために、教育、気候基金、雇用機会への投資の増加が提唱された。炭素集約型産業での教育とリスクリング、国家間での知見共有の必要性についても議論された。公正な移行に向けた、石炭火力発電の段階的廃止、発展途上国における経済発展と排出削減のバランス、未開発のリソースを活用して持続可能な開発目標（SDGs）を達成するための雇用創出など、財務的側面が触れられた。さらに、イノベーションに関連する制度的リスクと不公平の可能性、国境炭素税等を構築する際の発展途上国への収入還元や、脱炭素関連投資額の拡大に資する政府レベルのメカニズム構築についても議論された。



**ジョン・D・ムーア (モデレーター)**

ICEF 運営委員



**ホーセン・リー (モデレーター)**

ICEF 運営委員



**エイヤ・リタ・コーホラ**

ICEF 運営委員



**山口しのぶ**

国連大学サステナビリティ高等研究所 所長



**石川 知弘**

株式会社三菱UFJフィナンシャル・グループ  
経営企画部 部長



**アンドリュー・ジェフリーズ**

アジア開発銀行 (ADB) エネルギー部門エネルギー  
トランジションパートナーシップ (JETP) アドバイザー



**ハンフリー・ムレマ**

ユースサバイバルオーガニゼーション 会長



# サマライジングプレナリーセッション

## - ICEF2023の総括 -

本セッションでは、ICEF2023で開催されたすべてのセッションと議論を概観すると共に、来年の議題のアイデアについて議論を行った。振り返りとして、革新的な政策立案の重要性、技術革新の加速と多様なイノベーターの関与の必要性、およびサプライチェーンの安全保障が強調された。また、公正な移行を保証するための教育の重要性、化石燃料設備の段階的廃止とクリーンな代替策への投資の必要性が述べられた。さらに、気候変動の不確実性に対処する課題が認識され、これらの気候と社会問題に取り組むための時間と信頼構築の重要性が強調された。農業部門における問題、特に水の消費と廃棄物への対処の重要性、再エネの社会受容性の必要性についても言及された。

来年に向けた議題としては、気候変動を持続可能な開発目標 (SDGs) の文脈に統合する必要性、イノベーション、人工知能 (AI) の役割、ファイナンス、統合的アプローチ、バランスの取れたオープンで包括的な対話等が強調された。本セッションは、世界の指導者に対する提言で締めくくられ、粘り強さ、科学に基づいた政策、明確な戦略策定、気候変動の緩和への不断のコミットメントが強調された。

### ICEF 運営委員



田中 伸男 (委員長)



サリー・M・ベンソン



ゲオルク・エアトマン



エイヤ・リタ・コーホラ



黒田 玲子



ホーセン・リー



ヴィクラム・メータ



ジョン・D・ムーア



バリー・ムーサ



ネボイシア・ナキチェノヴィッチ



デービッド・サンダロー



イスマイル・セラゲルディン



バーツラフ・シュミル



ウー・チャンホワ



山地 憲治



## コンカレントセッション

### コンカレントセッション1 グローバルストックテイク

本セッションでは、グローバルストックテイク (GST) をテーマに、議論が行われた。GST はパリ協定に規定されている温室効果ガス排出削減に向けた努力の進捗状況を評価するメカニズムである。冒頭に登壇されたヘザー・マセコーシアリ氏 (UNFCCC) が GST のプロセスについて概説し、技術的評価の段階から現在の政治的段階に焦点を当て、紹介を行った。続いて、ペトラ・ミネロップ教授 (ダラム大学) より、NDC (国が決定する貢献) は国際法的には一方的な行為であり、GST を通じてその資格が与えられるとし、NDC と GST の相互作用としての役割について革新的な法的議論が提起された。また、津久井あきび氏 (IGES) は、GST のプロセスを通じて、民間セクター・学界・NGO などを含む非国家主体 (non-state actor) の関与の重要性が認識されてきたと述べた上で、COP28 における GST の成果は、国民が行動を起こせるような、実行可能なものである必要があると指摘した。

セッションの最後に、モデレーターのデービッド・サンダロー氏は、ICEF で強調されたイノベーションが、革新的な外交と協定のイノベーションにおいて、非常に重要な形でパリ協定の形成に直接的に作用していると示した。ICEF は COP28 の中心となる GST のような重要なテーマに関する対話を含め、UNFCCC プロセスと密接な関係を今後も保ち続けると結論が付けられた。



**デービッド・サンダロー (モデレーター)**  
ICEF 運営委員



**ペトラ・ミネロップ**  
ダラム大学 ダラム・ロー・スクール 国際法 教授



**津久井 あきび**  
公益財団法人地球環境戦略研究機関 (IGES) フェロー



**ヘザー・マセコーシアリ**  
UNFCCC 事務局 プログラムオフィサー



## コンカレントセッション2 食料・水・気候変動

本セッションでは、食料、水、気候変動の課題に取り組むためには、従来のアプローチではなく、協力とイノベーションが必要であることが強調された。セッション内では、脆弱なアフリカ地域での食料に関連する問題が取り上げられ、異なるセクター間の協力、政府の役割の明確化、革新的なレジリエンスアプローチの必要性が強調された。次世代の科学者が参加するためのプラットフォームの例も挙げられた。また、低炭素経済と気候スマートな世界に基づいた人権アプローチが提案され、資源効率のための気候に適したソリューション、再エネへの投資によるエネルギーセキュリティ、農業イノベーションを通じた市場進出の必要性が強調された。水資源に関しては、炭素排出量の削減、SDGsのための水資源の保全、低炭素イニシアティブの促進が議論された。食料安全保障を土壌の品質に関連付けながら、地球温暖化の対策として食料生産、消費、土地管理の変革の必要性が強調された。また、食料安全保障、GHG 削減、生物多様性の合意などを統合したモデルが紹介され、政策提言を行うと同時に、食料安全保障と持続可能性を実現するためのパートナーの動員も提案された。

このセッションの議論では、気候変動のディスカッションにおいて化石燃料削減のみならず、農業や食料生産も重要なテーマとして取り上げる必要性が強調された。食品ロスに関しては、生産後と収穫後の廃棄物について議論が行われ、先進国での食品賞味期限やラベリングの見直しに関しても言及があった。



**イスマイル・セラゲルディン (モデレーター)**

ICEF 運営委員



**パトリア・スコットランド**

英連邦事務総長



**フィービー・クンドゥーリ**

アテネ経済商科大学 教授

デンマーク工科大学 教授



**デシゲン・ナイドゥ**

南アフリカ大統領府気候委員会 気候適応エグゼクティブ



**ラタン・ラル**

オハイオ州立大学ラタン・ラル炭素管理・隔離センター

(C-MASC) センター長

オハイオ州立大学 土壌科学特別荣誉教授



**ファテン・アティグ=バハール**

未来の地球 水・エネルギー・食料 ネクサス グローバル

リサーチネットワーク 運営委員



### コンカレントセッション3 革新的な再生可能エネルギーの利用

本セッションでは、再エネの革新的利用の重要性が強調された。再エネの役割については、供給だけでなく、それがどのように変換され、どのように最終利用されるのか、体系的に考える必要がある。再エネの利用拡大には、変動再エネの系統統合の技術面でのソリューションや官民協働の重要性が指摘された。ペロブスカイト太陽電池や次世代浮体式洋上風力発電技術である2重反転垂直軸型タービンなど、最先端の再エネ発電技術の動向も紹介された。また、途上国での再エネ電力へのアクセスを簡易に拡大する「ジュークボックス式」のシステムに加え、地域共生型の地熱導入についても議論された。再エネの大規模系統統合による慣性力の課題が指摘され、その解決策として、Power to Gas (P2G) 技術による水素・アンモニア製造や系統のデジタル化が挙げられた。

再エネの革新的「利用」については、低コスト化された再エネを利用した水素製造と利用拡大、地域に合った再エネの利用推進などが挙げられた。また、発電設備のリサイクルの促進や再エネ利用のモチベーション醸成の重要性も強調された。



**ネボイシア・ナキチェノヴィッチ**  
(モデレーター)

ICEF 運営委員



**山地 憲治 (モデレーター)**

ICEF 運営委員



**黒田 玲子 (モデレーター)**

ICEF 運営委員



**ビョルン・シモンセン**

ワールドワイドウィンド 最高経営責任者



**ダグラス・アレント**

米国国立再生可能エネルギー研究所 戦略的官民パートナーシップ担当 エグゼクティブ・ディレクター



**レベッカ・ブレガント**

パインベリー共同創業者兼チーフマーケティングオフィサー



**山東 晃大**

公益財団法人自然エネルギー財団 上級研究員



**仁木 栄**

国立研究開発法人新エネルギー・産業技術総合開発機構 (NEDO) 技術戦略センター サステナブルエネルギーユニット長



## コンカレントセッション4 持続可能な航空輸送

航空分野における温室効果ガス排出量は現在2%程度しか占めていないものの、今後増加が予想され、様々な技術開発が進められている。とりわけ本セッションでは、持続可能な航空燃料 (Sustainable Aviation Fuel ; SAF) と電動航空機を軸にして、燃料の競合性、適用性、運用コストの経済性、そして政府からの助成の必要性が議論された。次世代航空燃料と注目されるSAFと電動航空機は、競合する技術ではなく、共生することができ、航空機の機種やエネルギー密度の違いによって、両者は差別化することが可能であることが確認された。例えば、エネルギー密度が高いSAFは大型航空機に適しているのに対して、小型航空機はエネルギー密度が低い電気の利用に利点がある。

現在は従来の燃料がコスト面で優位ではあるものの、脱炭素が実現した社会においては、新たな燃料が低コストで供給されることが予想される。政府の支援によって、こうした航空技術が開発され、「持続可能な航空」を達成することが可能となることが議論された。



**ゲオルク・エアトマン (モデレーター)**

ICEF 運営委員



**ヴィクラム・メータ (モデレーター)**

ICEF 運営委員



**榎本 啓士**

NEDO 技術戦略センター 主任研究員  
金沢大学 理工研究域 准教授



**西村 勇毅**

日揮ホールディングス株式会社  
サステナビリティ協創ユニット プログラムマネジャー



**ローラ・レオンチーニ**

イートン エネルギー転換・デジタルサービス  
事業開発マネジャー



**エイダ・ツェー**

ヴォラー・エア・モビリティ取締役 共同設立者



## コンカレントセッション5 核融合テクノロジー

本セッションでは、主に ITER 計画の役割、核融合テクノロジーに対する官民投資の必要性、スタートアップ企業を含む民間企業の役割について議論が行われた。鎌田裕氏からは、ITER 計画が核融合テクノロジーと人材育成において世界に開かれたプラットフォームであることが紹介された。スコット・スー氏とカール・ページ氏からは、経済合理性を確保しつつ気候変動目標を達成するための手段として核融合は有用な選択肢の一つであり、実証に向け官民が投資を加速させる必要性があると指摘された。フランセスカ・フェラツァ氏と田口昂哉氏からは大手エネルギー企業・スタートアップ企業として、磁場閉じ込め式技術に関する各社の取り組みや今後のビジョンについて紹介された。

質疑応答では、核融合の開発サイクルを加速するための手段を問う質問に対し、多様な技術・アプローチで実証化を目指すために官民の連携が必要であると回答された。また、サプライチェーンの構築に向けて必要な取り組みを問う質問に対しては、全世界共通の規格や規制を準備する必要があると回答された。



**サリー・M・ベンソン (モデレーター)**

ICEF 運営委員



**田中 伸男 (モデレーター)**

ICEF 運営委員長



**田口 昂哉**

株式会社 Helical Fusion 代表取締役



**スコット・スー**

米国エネルギー省 科学・イノベーション担当次官室  
シニアアドバイザー兼リードフュージョンコーディネーター



**鎌田 裕**

ITER 機構 副機構長



**カール・ページ**

アントロポセン研究所 代表 兼 共同創設者



**フランセスカ・フェラツァ**

エニ社 磁気核融合イニシアチブ責任者



## その他イベント

### その他イベント NEDO グリーンイノベーション基金事業シンポジウム

#### 「次世代型太陽電池で実現するグリーン都市」

カーボンニュートラルの実現に向け、世界各国が再生可能エネルギーの大規模な導入を進めているが、現在課題になっているのが、再生可能エネルギーの設置場所が限られる都市部のカーボンニュートラル化である。このような環境に適した次世代太陽光発電として期待されているのがペロブスカイト太陽電池である。

本セッションでは、産学官の専門家が一堂に会し、日本の「グリーンイノベーション基金事業」におけるペロブスカイト太陽光発電の研究開発・実証に注目しながら、コスト低減および普及戦略について、様々な角度から議論した。

また、セッションでは、都市部における普及には、建物一体型太陽光発電の専門家、自治体、都市プランナー等の協力が必要であり、積極的なステークホルダーの関与の重要性が強調された。この文脈で、「グリーンイノベーション基金事業」は、日本や世界において、多様なステークホルダーの協力を得て、太陽光発電の拡大を促進していくためのよいモデルであることが強調された。



**高村 ゆかり (モデレーター)**

東京大学未来ビジョン研究センター 教授



**山崎 光浩**

NEDO 新エネルギー部 主任研究員



**別所 毅隆**

積水化学工業株式会社 R&D センター PV グループ  
課長 (工学博士)



**山本 憲治**

株式会社カネカ 太陽電池・薄膜研究所 常務理事 所長



**フランシスコ・フロンティエリ**

南スイス応用科学芸術大学 (SUPSI) 環境建設デザイン学科  
ビルシステム部門長



**グエン・ミン・ティエン**

第三タンロン工業団地 電力部門 リーダー



**安齋 一貴**

資源エネルギー庁 新エネルギー課 課長補佐

### その他イベント 二酸化炭素除去技術 (CDR)

#### 「二酸化炭素除去 (CDR) の市場拡大に向けた初期需要の創出」

本セッションの基調講演では、Carbon Dioxide Removal (二酸化炭素除去) の市場拡大に向けた日米の政策の最新動向について、両国の政策担当者から紹介が行われた。日本からは、「ネガティブエミッション市場創出に向けた検討会」での議論を踏まえた政府支援やルール形成に関する今後の方向性について、米国からはインフレ削減法案や DAC Hub、Mission Innovation での活動など、カーボンマネジメント政策の概要について紹介された。

また、パネルディスカッションでは、CDR のプロジェクトデベロッパー (供給側)、取引仲介者、バイヤー (需要側) を招き、ネットゼロ実現に向けた CDR の必要性、早期に取り組むことのメリット・意義、今後の市場拡大のために必要な対策や、初期需要の必要性について議論が行われた。



**田中 哲也 (モデレーター / スピーカー)**

経済産業省 大臣官房審議官 (産業技術環境局担当)



**マーク・アクキーヴィッツ**

米国エネルギー省 化石エネルギー・カーボンマネジメント局  
カーボンマネジメントテクノロジー部長



**クリストフ・ポイトラー**

クライムワークス 最高気候政策責任者



**小山 真生**

三菱商事株式会社 次世代エネルギー部門 カーボンマネジメント室  
Carbon Dioxide Removal ライン長



**香田 和良**

株式会社商船三井 エネルギー営業本部 エネルギー営業戦略部  
カーボン事業チーム チームリーダー



## その他イベント 若きイノベーターとの対話

本セッションでは、脱炭素社会の実現に向けた若手イノベーターやスタートアップ企業の役割について議論された。このセッションでは、イノベーションとクリーンエネルギー革命の推進に重要な役割を果たしてきた ICEF 運営委員会のメンバーと、世界中から最も刺激的な若手から中堅のイノベーターが集まり、対話形式の討論を行った。

議論は、一般市民とのコミュニケーション、起業家精神、教育からソーシャルメディアの役割まで多岐にわたった。例えば、絵本の活用が次世代の気候変動への関心を育むのに役立つことや、ソーシャルメディアだけでなくフェイス・トゥ・フェイスのコミュニケーションで情報を交換することの重要性など、登壇者たちはそれぞれの経験に基づいたアイデアを披露した。逆に、登壇者から ICEF 運営委員への質問もあり、若い世代や女性の意思決定への参加が重要であることが議論された。さらに、各政府に若手イノベーターのアドバイザーグループを設置することで、カーボンニュートラルに貢献できることや、このような議論の場は今後も継続していくべきであるとの意見が出された。



**ウー・チャンホウ (モデレーター)**

ICEF 運営委員



**ネボイシア・ナキチェノヴィッチ**

(モデレーター)

ICEF 運営委員



**アンドリュー・Z・ファイアー**

スタンフォード大学医学部教授 (病理学・遺伝学)  
ノーベル生理学・医学賞受賞者



**田口 昂哉**

株式会社 Helical Fusion 代表取締役



**ローラ・レオンチーニ**

イートン エネルギー転換・デジタルサービス 事業開発マネジャー



**山東 晁大**

公益財団法人自然エネルギー財団 上級研究員



**トリシュナ・ナグラニー**

KAIKU 共同創業者



**ジン・チェン**

清華大学社会科学学院 博士研究員



**和田 菜摘**

SOLIT 株式会社 環境人権管理部



**ファテン・アティグ=バハール**

未来の地球 水・エネルギー・食料 ネクサス グローバルリサーチ  
ネットワーク 運営委員

## その他イベント BloombergNEF 共催イベント

### 「グローバル・日本における最新の気候変更シナリオから分かるビジネス機会・リスク」

本セッションでは、ブルームバーグ NEF (BNEF) が世界および日本における気候変動シナリオについて議論し、エネルギー転換に関連したビジネス機会とリスクに焦点をあてた。セッションの前半において、BNEF は長期エネルギー見通しを解析するシナリオ分析について説明した (<https://about.bnef.com/new-energy-outlook-series/>)。モデル設定では、電力、運輸、産業、建物の各部門における技術コストを考慮しており、パリ協定の目標を達成しながら世界がネットゼロを実現するネットゼロシナリオにはカーボンバジェット (炭素予算) つまり排出量制約を適用している。ネットゼロシナリオでは、迅速な脱炭素への取り組み、全部門での新しい気候技術の導入、および世界的なエネルギー転換における巨大な投資機会の重要性が示されている。また BNEF はネットゼロ達成の軌道に乗るための政府が考慮すべき政策についても提言している。

後半では、BNEF は企業におけるエネルギー転換に関するリスクと機会について紹介した。そこでエネルギー転換との関与度合いを含め、将来を見据えた対策をベースとしたポートフォリオ評価の重要性を強調した。

(<https://about.bnef.com/blog/climate-transition-an-accelerating-threat-to-corporate-futures/>)



**ヨナス・ルーズ**

ブルームバーグ NEF サステナビリティ・気候変動分析部門長



**アリ・イザディ**

ブルームバーグ NEF アジア太平洋地域統括



**菊間 一柁**

ブルームバーグ NEF 日本市場再生可能エネルギー  
シニア・アソシエイト

## その他イベント UNIDO共催イベント

### 「鉄鋼・セメント産業における脱炭素化への公正な移行に向けた変革 - 低・ゼロ炭素製品へ向けた需要と供給の拡大に向けた方策」

本セッションでは、鉄鋼やセメント産業における本格的な脱炭素をどのように達成するかについて議論が行われ、日々の活動において直面する課題および産業セクターにおける脱炭素促進に必要な条件に関する考え方について紹介された。

イベントを企画した UNIDO は、国際規格の調和によるグリーン公共調達を通じて、低炭素原材料の需要を促進することを目標とした政府および民間部門の国際的な連携である「産業ディープ脱炭素イニシアチブ (IDDI)」について紹介した。

基調講演でコロンビア大学世界エネルギー政策センターのクリス・バタイユ博士は、世界規模で産業分野の脱炭素を促進するための課題および可能なソリューション、技術に関して概括した。世界で最大の CO2 排出源である産業セクターの脱炭素に対しては、効率性と循環性が特に重要であることを強調した。

基調講演後のパネルディスカッションでは、公共および民間セクターから 4 人のパネリストが登場し、鉄鋼とセメント産業の脱炭素に関してデータ収集と報告、財政的インセンティブ、R&D、国際連携の観点から議論した。議論の中では特に、産業分野の脱炭素に関する課題を効果的に解決するには、官民連携を含めた国際協力が必要という共通認識が示された。



**鈴木 祥成 (司会)**

国際連合工業開発機関 (UNIDO)  
脱炭素・サステナブルエネルギー部 工業開発官



**ラナ・ゴネイム (モデレーター)**

国際連合工業開発機関 (UNIDO) エネルギーシステム・脱炭素課長



**クリス・バタイユ (キーノートスピーカー)**

コロンビア大学地球エネルギー政策センター  
アジャクトリサーチフェロー



**カナン・テリニョス・ゲンセル**

トルコセメント製造業協会 環境・気候変動部長



**トーマス・ギョ**

グローバルセメントコンクリート協会 チーフエグゼクティブ



**アイマン・ファシー**

エズ・スチール 製品開発・品質管理エグゼクティブマネジャー



**堂野前 等**

日本鉄鋼連盟 国際環境戦略委員会 委員長

## スペシャルセッション エネルギートランジションに関する特別対談

本セッションでは、3名の著名な登壇者により世界の現状とネットゼロ排出に向けた道筋について議論が行われた。エネルギー移行は、装置 A から装置 B という移行ではなく、世界全体の変化であり、全てのものが変わらなければならないことが強調された。ネットゼロ排出に向けた軌道に乗っておらず、現在行っていないような規模で、真に劇的で迅速かつ深い行動を取らなければならないことが指摘された。また、気候変動に関する目標をオーバーシュートする可能性があり、その場合ネガティブエミッション技術により事後的に温室効果ガスを減らすという案も挙げられ、問題の主要な要因である部門をその解決に大きく貢献する部門にする手法が多く考えられることから、農業部門に注目することも価値があることが言及された。加えて、イノベーションこそがネットゼロ排出達成に向けた鍵であり、至る所にイノベーションの機会があることも述べられた。



**デービッド・サンダロー (モデレーター)**

ICEF 運営委員



**イスマイル・セラゲルディン**

ICEF 運営委員



**パーツラフ・シュミル**

ICEF 運営委員



**マイケル・リープライヒ**

リープライヒ アソシエイツ 会長兼 CEO

## 閉会式



### ① ロードマップ紹介

デービッド・サンダロー  
ICEF 運営委員

### ② ステートメント発表

山地 憲治  
ICEF 運営委員

### ③ 総括

田中 伸男  
ICEF 運営委員長

### ④ 閉会挨拶

齋藤 保  
国立研究開発法人新エネルギー・産業技術総合開発機構 (NEDO) 理事長

# ステートメント

## ICEF2023 運営委員会ステートメント

2023年10月5日

### 1. ICEF 設立 10 周年

2023 イノベーション・フォー・クール・アース・フォーラム、ICEF は、10 周年を祝福する。この記念すべき機会に、運営委員会は以下の特別声明を発表し、過去 9 年間の歩みを振り返るとともに、次の 10 年間で展望する。

#### 1. 2014 年の ICEF 設立年次会合以来、我々が達成したこと

- 2014 年、ICEF は日本の故安倍晋三元首相が「世界をリードする政策立案者、ビジネスパーソン、研究者が一堂に会し、イノベーションを通じて気候変動に対処するために協力し合える新たな国際会議の設立を提案」したことから始まった。第1回年次会合に参加した故安倍元首相は、「前例のない試みであり、世界経済フォーラムのエネルギー・環境重視版である」と述べた。
- ICEF の初期の成果のひとつは、2015 年の COP21 の成功につながった交渉においてイノベーションの重要性を強調し、パリ協定の形成に貢献したことである。
- 2016 年、ICEF は「少なくとも人為起源の CO2 排出量を正味ゼロにする」という野心的な目標を掲げた。それ以来、この目標に対する ICEF の継続的なアドボカシーは、多くの国、準国家機関、企業が今世紀半ば頃にネットゼロ排出を達成することを誓約することに貢献している。
- 設立当初から、ICEF の一貫したメッセージは、技術革新と社会革新の両方が気候変動への対応に不可欠であるということである。この信念を念頭に、ICEF は公共部門と民間部門の両方の役割を詳しく説明してきた。また、国際協力も中心的なテーマとなっている。
- 2017 年以来、ICEF の強い信条は、気候変動の社会的・統制的側面に取り組むためには、多様性、包括性、正義を強化しなければならないということである。ICEF の会議では、若者や女性を含むバランスの取れた参加が実現し、多面的な議論につながっている。
- ICEF は脱炭素化に対して一貫して技術中立的なアプローチを採用しており、これには自然エネルギー、持続可能な原子力、炭素回収・貯留、そしてあらゆる部門にわたる新たな最終利用技術の議論が含まれる。
- ICEF の貢献には、クリーンエネルギー技術の革新ロードマップの作成も含まれる。炭素利用、直接空気回収、炭素鉱物化、低炭素アンモニアなどに関するロードマップは、ネット・ゼロ・エミッションの達成に役立つ技術について、幅広い利害関係者に情報を提供するのに役立っている。「バイオマス炭素除去・貯留 (BiCRS)」という用語は、ICEF のロードマップで初めて提唱され、現在では広く使われている。
- ICEF は、幅広い利害関係者が交流し、気候変動への対応におけるイノベーションを提唱するためのユニークなフォーラムとなっている。日本では、ICEF をきっかけに他の関連する国際会議が次々と開催され、現在では「東京 GX ウィーク」として最高潮に達している。
- ICEF がこの 9 年間で発展してきた中、気候変動を取り巻く世界情勢も大きく変化してきた。2015 年にパリ協定が採択された後、2018 年には IPCC の 1.5°C に関する特別報告が出され、国や地域が今世紀半ば頃にネットゼロを約束する機運がさらに高まった。我々は、再生可能エネルギーや電気自動車を筆頭に、新技術の大規模な導入を目の当たりにしてきた。しかし、各国の国が決定する貢献 (NDC) と 1.5°C の道筋の間には依然として大きな隔りがある。このギャップを埋めるためには、加速度的な進展が必要である。

## 2. グリーントランスフォーメーション（GX）を進めるために必要なこと

- 今年、日本の議長国の下、広島で開催された G7 首脳会議は、「我々は、グリーントランスフォーメーションを世界的に推進及び促進し、我々の経済の変革の実現を目指して協働する」ことに合意した。G7 間の合意が必ずしも世界的なコンセンサスでないことは明らかだが、グリーントランスフォーメーション（GX）は我々の共通の課題であり、共通の機会である。
- G7 首脳は、「エネルギー安全保障、気候危機及び地政学的リスクに一体的に取り組むことにコミット」した。また、G7 首脳は、「我々は、各国のエネルギー事情、産業・社会構造及び地理的条件に応じた多様な道筋を認識しつつ、これらの道筋が 2050 年までにネットゼロという共通目標につながることを強調する」とも述べている。このような声明は、我々が GX を追求するための基本的かつ共通の方向性を示している。
- エネルギー安全保障を高め、エネルギー転換による環境への悪影響のリスクを低減するためには、クリーンエネルギー技術のサプライチェーンを拡大・多様化し、重要鉱物の代替品を見つけることが不可欠である。
- 先進国の努力だけでは十分ではない。技術移転や気候変動資金を含むテーマでの南北国際協力の強化が不可欠である。

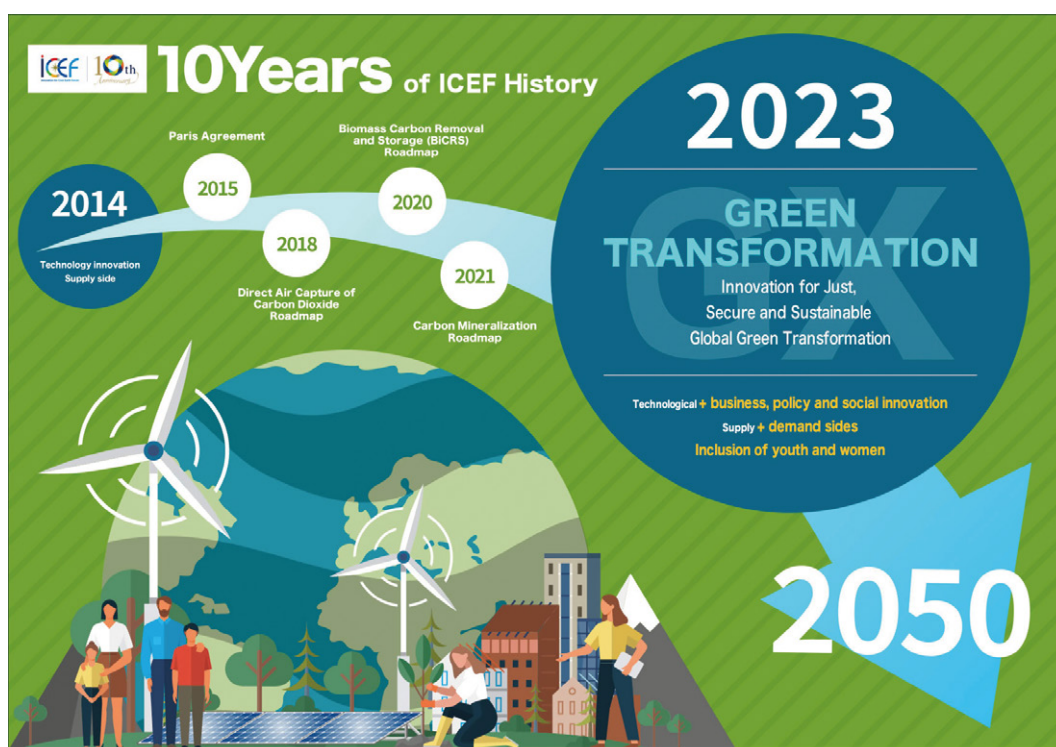
## 3. 将来に向けて

- ICEF の基本的な役割と使命は変わらない。ICEF は、多様性と包括性を強化しながら、技術革新と社会革新の両方を促進することに引き続きしっかりと取り組んでいく。今後数年間、我々の取り組みはさらに強化されるであろう。IPCC の AR6 が指摘したように、この 10 年間の選択と行動は、現在そして今後何千年にもわたって影響を及ぼすことになる。これまで以上に緊急に、この重要な 10 年間に気候危機に取り組むための解決策の規模拡大を加速させる必要がある。
- ICEF は、現在利用可能な解決策の展開を加速し、温室効果ガスの排出を削減し大気から二酸化炭素を除去するためのアプローチを革新し続けることを含む、新たな焦点となる課題に取り組む。その際、ICEF は国の視点だけでなく、セクター別の考え方、特に削減が困難なセクターに関する考え方の重要性を強調する。さらに、持続可能な金融は、より焦点が当てられるべきものである。金融界は、クリーンエネルギー技術の導入拡大にもっと関与する必要がある。
- ICEF は、重要な素材、エネルギー技術及び製造のための新しく多様で安全なサプライチェーンの開発に専心している。
- ICEF は、エネルギー転換の中でグローバル・サウスが成功し、避けられない気候変動への影響に対処できるよう、南北協力の規模を拡大し、その効果を高めることに特に注意を払っている。
- ICEF は、次世代を担うイノベーターが新しい解決策を実現し成功できるよう、これらのイノベーターが世界のリーダーと直接交流し、リソースにアクセスし、新しい市場に参入できるよう支援し続ける。

## II. ICEF2023

“公正で安全かつ持続可能なグローバル・グリーントランスフォーメーション（GX）のためのイノベーション”という主題の下、ICEF の第 10 回年次会合（ICEF2023）は 2023 年 10 月 4 日と 5 日に、エネルギー・環境問題を幅広く議論する 10 の会議「東京 GX ウィーク」のイニシアチブとして、対面とオンラインのハイブリッド形式で開催された。今回のイベントには、79 の国・地域を代表する政府、国際機関、産業界、学術界から約 1,700 人が参加した。ICEF2023 の閉会に当たり、運営委員会は、一連の議論に基づき以下の声明を発表する。

- ICEF2023 では、エネルギーと資源の安全で強靱なサプライチェーンを構築するための革新的な政策立案について詳細な議論が行われた。国境を越えた協力の必要性が確認され、政策、技術、金融、イノベーションの接点が議論された。
- ICEF2023 では、誰一人取り残すことなく包括的に GX を追求する「GX together」についても議論された。ジャスト・トランジションが地域的、社会経済的観点から議論され、公共と民間のプレントイド・ファイナンスのメカニズムの役割についても詳しく説明された。
- 先進的な専門家たちは以下の 5 つの具体的な問題を扱った
  - 第一に、パリ協定の下、国連気候変動枠組条約締約国が 5 年ごとに NDC を更新・強化する際の情報提供プロセスであるグローバル・ストックテイクである。第 1 回グローバル・ストックテイクは、間もなく COP28 で集大成される。ICEF2023 は、民間セクターや NGO の意見を収集する絶好の機会となった。
  - 第二に、食糧、水、エネルギー、気候変動の関連性である。水と土壌に関連した持続可能な農業と食料安全保障、そして気候変動に対処するために必要な適応策と強靱性対策が議論された。
  - 第三に、再生可能エネルギーの革新的かつ包括的な利用である。国連の 17 の持続可能な開発目標との相乗効果や相互利益を通じて、地域社会、環境、生態系に対する利益を最大化し、負の影響を最小化する方法などが話題に上った。開発途上国の役割が強調された。
  - 第四に、持続可能な航空である。2050 年以降の持続可能な航空燃料（SAF）供給の予測、航空燃料の代替品の特定、水素電気パワー・トレインのような推進システム改善の機会などがトピックに含まれた。
  - 第五に、核融合技術である。有望技術の開発や投資誘致における新興企業や大学のスピノフの役割など、最近の動向が議論された。
- ICEF 運営委員会は、ICEF2023 および過去 9 回の会合における講演者および聴衆の積極的な参加に深く感謝する。我々は、多様なステークホルダー、特に先進的な若者、女性、イノベーターを巻き込み、カーボンニュートラルで持続可能な未来のための技術革新と社会革新の機運をより高めることに引き続き尽力する。



# ロードマッププロジェクト

## ICEFロードマッププロジェクト 人工知能 (AI) と気候変動緩和

本セッションでは、AI と気候変動緩和に関するロードマップのドラフトが発表された。冒頭でこのロードマップは、AI がいかに温室効果ガスの排出を削減できるのか?という問いの下、AI 活用により排出量削減が見込まれる分野 (モニタリング、電力系統、製造業、材料開発、フードシステム、および輸送) について検討するとともに、障壁、リスクおよび政策等の横断的なトピックを議論し、所見と提言をまとめたものである旨サンダロー氏から説明があった。

続いて、コロンビア大学クチューケルピア氏が、AI の 3 要素 (データ、モデル、計算) について説明するとともに AI が機械学習に依存することを強調し、KAIKU ナグラニ氏が気候変動の影響に言及、カーボンダイレクトのフリードマン氏は AI 活用事例として気候変動モデルを紹介し、カーボンダイレクトのマコーミック氏はメタン排出のモニタリングにおける大規模なセンサーデータ処理において AI の活用が期待できる一方で AI リテラシーなどの障壁を指摘、コロンビア大学ファン氏は送電網インフラにおけるエネルギーシステムモデルの開発などへの適用可能性に触れ、コロンビア大学リアル氏は農業分野で AI を活用することにより世界の GHG 排出量の 30% を占めると推定されるフードシステムからの排出削減が見込めると指摘した。

質疑応答では、ライフサイクル排出量の改善、および先住民の知識の認識における AI 活用の可能性などについて質問がなされ、パネリストからは LCA による脱炭素の目的で最適化された材料開発への AI 活用の可能性が示されるとともに、モデレーターからは AI を用いた言語解釈により飛躍的に翻訳性能が向上している事例が紹介され、今後、文化間のコミュニケーションが促進される可能性が指摘された。



**デービッド・サンダロー (モデレーター)**

ICEF 運営委員



**フリオ・フリードマン**

カーボンダイレクト シニアサイエンティスト



**ジーウェン・ファン**

コロンビア大学 リサーチ・アソシエイト



**コリン・マコーミック**

カーボンダイレクト チーフイノベーションオフィサー



**アルプ・クチューケルピア**

コロンビア大学 コンピューターサイエンス 非常勤准教授



**トリシュナ・ナグラニ**

KAIKU 共同創業者



**エレナ・メンデル・リアル**

コロンビア大学 国際公共政策大学院



## ICEF 運営委員

**田中 伸男 (委員長)**

元国際エネルギー機関 (IEA) 事務局長  
タナカグローバル株式会社 代表

**アドナン・Z・アミン**

ハーバード大学ケネディスクール 科学・  
国際関係ペルフェアセンター シニアフェロー  
国際再生可能エネルギー機関 (IRENA) 名誉事務局長  
COP28 議長上級顧問

**サリー・M・ベンソン**

ホワイトハウス科学技術政策局 副所長・最高戦略責任者  
スタンフォード大学教授 (エネルギー理工学)

**ゲオルク・エアトマン**

ベルリン工科大学 エネルギーシステム 退官教授  
KSB Energie AG 理事長

**エイヤ-リタ・コーホラ**

欧州経済社会評議会 CCMI 代表

**黒田 玲子**

中部大学先端研究センター 特任教授  
東京大学 名誉教授  
G7 GEAC (男女共同参画諮問委員会) 2023 委員

**ホーセン・リー**

気候変動に関する政府間パネル (IPCC) 元議長

**リチャード・レスタ**

マサチューセッツ工科大学 副学長

**ヴィクラム・メータ**

センター・フォー・ソーシャル・アンド・  
エコノミック・プログレス (CSEP) 研究財団 会長

**ジョン・D・ムーア**

ブルームバーグ NEF CEO

**バリー・ムーサ**

南アフリカ大統領気候委員会 議長  
元国際自然保護連合 (IUCN) 会長

**ネボイシア・ナキチェノヴィッチ**

欧州委員会主要科学アドバイザーグループ (GCSA)  
バイスチェア  
国際応用システム分析研究所 (IIASA) 名誉研究員  
ウイーン工科大学 エネルギー経済 名誉教授

**デービッド・サンダロー**

元米国エネルギー省 (DOE) 次官代行  
コロンビア大学世界エネルギー政策センター 創立フェロー  
コロンビア大学国際関係公共政策大学院  
エネルギー・環境部門 共同ディレクター

**イスマイル・セラゲルディン**

ニザーミー・ガンジャヴィー国際センター評議会議長  
アレキサンドリア図書館 創立名誉館長  
元世界銀行副総裁

**バーツラフ・シュミル**

マニトバ大学 特別名誉教授

**ウー・チャンホフ**

ジェレミー・リフキンオフィス 中国・アジアディレクター  
中国環境専門家協会 (PACE) 共同創設者  
CN イノベーション 最高戦略責任者  
アジア・太平洋水フォーラム 執行審議会副議長

**山地 憲治**

公益財団法人地球環境産業技術研究機構 (RITE) 理事長  
東京大学 名誉教授



## 共催挨拶



外務省  
**穂坂 泰**  
外務大臣政務官

世界全体の気候変動対策の進捗評価を行う COP28 を控え、気候変動への注目が高まる中、産官学のリーダーが集い、カーボンニュートラルの実現等に向けたイノベーションについて議論を行う ICEF2023 の開催に祝意を表します。

今年の G7 広島サミットでは、「エネルギー安全保障、気候危機及び地政学リスクに一体的に取り組むことにコミットする」という内容が首脳コミュニケに盛り込まれ、各国でエネルギー安全保障と気候変動対策の両立を実現することがますます課題となっています。その際に鍵を握るのが、「イノベーション」です。

この会議が気候変動問題の解決へとつながる素晴らしい成果を生むことを、心から願っています。



文部科学省  
**山田 太郎**  
文部科学大臣政務官

産学官のリーダーたちが気候変動問題について議論する ICEF2023 が開催されることを、共催する文部科学省を代表してお祝いを申し上げます。

カーボン・ニュートラルを達成するには、世界の産学官が力を合わせ、研究開発を通じたイノベーションを創出することが不可欠です。本日、世界中から集まった、政府、国際機関、産業界、アカデミアなど様々なバックグラウンドを持ったリーダーが、地球温暖化問題を解決する鍵であるイノベーションについて議論し、その重要性を世界に発信されることを期待しています。

皆様の多大なる貢献に感謝するとともに、今回の会合を通じて更なる国際連携が進むことを心から願っています。



農林水産省  
**高橋 光男**  
農林水産大臣政務官

記念すべき第 10 回目の開催を迎え、産学官の世界のリーダーの皆様がご参集されることに深く感謝と敬意を表します。農林水産省では、2021 年 5 月に策定した「みどりの食料システム戦略」及び昨年施行した関連法に基づき、イノベーション

を活用して食料・農林水産業の生産力向上と持続性の両立の実現に取り組んでいます。

また、本年 10 月に採択された「日 ASEAN みどり協力プラン」に基づき、我が国と気候条件の近いアジア・モンスーン地域において、ASEAN 各国と連携して環境負荷低減の取組を進めていくこととしており、引き続き 2050 年のカーボンニュートラルの達成に向けて積極的に貢献してまいります。



環境省  
**朝日 健太郎**  
環境大臣政務官

今年日本は G7 議長国として、気候・エネルギー・環境大臣会を札幌で開催し、ネットゼロ・循環経済・ネイチャーポジティブ経済を統合的に実現することの重要性について認識を共有しました。この成果は G7 広島サミットにも引き継がれました。

また、サミットでは「ロシアのウクライナ侵攻に伴うエネルギー市場への影響下であっても、遅くとも 2050 年までに温室効果ガス排出ネット・ゼロを達成するという我々の目標は揺るがない」との決意を改めて確認することができました。

世界が様々な困難に直面しつつも、目標達成へと進んでいくために必要なイノベーションについてなされた皆様の議論が 2050 年のネットゼロ実現につながることを願います。

## ICEF2023フォトギャラリー







# ICEF2024

---

第11回年次総会

---

2024年秋 開催予定

**Official Website**

<https://www.icef.go.jp/>



**ICEF Official YouTube  Channel**

<https://www.youtube.com/channel/UC7ouNL9NbvDomDTfiubi8iw>



**Follow us on LinkedIn **

[www.linkedin.com/company/icef-forum-tokyo/](http://www.linkedin.com/company/icef-forum-tokyo/)

